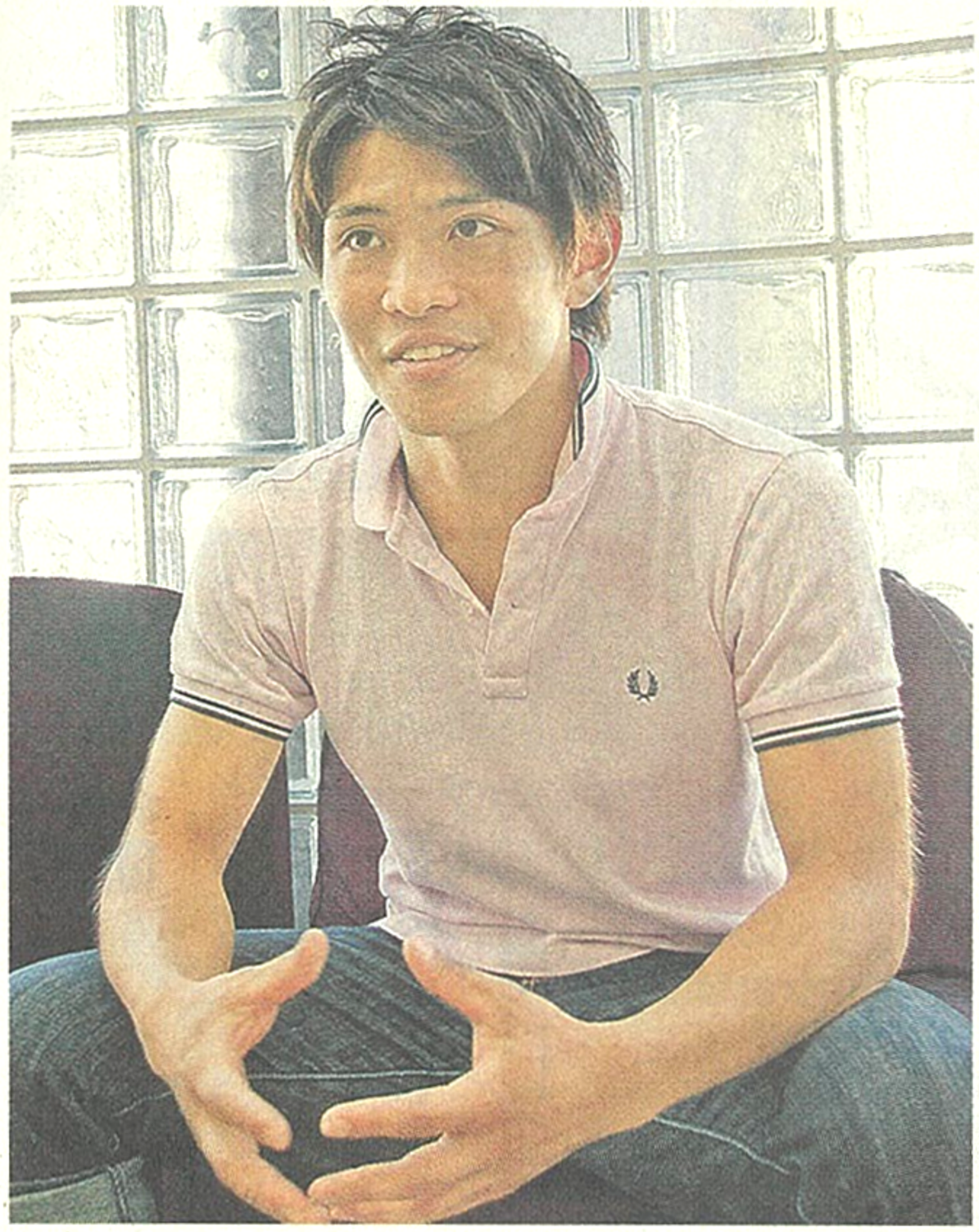
筑波大ソーランチーム「斬桐舞」初代代表

守屋 俊甫 さん(24)

障害者も一緒に楽しもう



■住民巻き込んでつくばを元気に

もりや・しゅんすけ　1986年6月生まれ。北海道出身。2005年に札幌市内の高校を卒業後、筑波大体育専門学群に入学。08年10月にチームを立ち上げた。週に2回ほど、つくば市内で練習している。同市在住。

筑波大のよさこいソーランチーム「斬桐舞（きりきりまい）」の初代代表で、障害の有無などを乗り越え、たくさんの人が一緒に踊りを楽しめる「ユニバーサル・ソーラン」を掲げて活動している。「障害があっても、一緒に楽しめる社会をつくりたい」。大きな願いを、踊りに込める。

「ユニバーサル・ソーラン」の始まりは、「おーちゃん」こと、全盲のカメラマン、大平啓朗（ひろあき）さん(三)＝北海道函館市＝との出会いだった。大平さんは心理学を学ぶため、二〇〇八年春に同大大学院に研究生として入学。同じ北海道出身者ということもあり、意気投合した。

同年夏、大平さんを通して、映画の「ユニバーサル上映」という考え方に初めて触れた。上映に副音声や手話通訳などを付け、映画館にバリアフリーを取り入れることで、障害がある人も健常者も同じ場所で映画を鑑賞し、感動を共有しようというものだ。通常の映画上映に違和感や不満があったわけではない。だが、誰も排除しないという考え方に驚き、共感。

それから約二カ月後。北海道のソーラン節にユニバーサル上映の考え方を取り入れ、大平さんや学内の北海道出身者とともにサークルを立ち上げた。

発足から約二年がたった今では、メンバーは学生のほか、子どもや主婦、障害のある人など約七十人。年間六十回ほど、県内外の祭りやイベントに出演している。大平さんは、踊り子の体をさわって動きを確認し、言葉にすることで振りを覚え、いすに座って演舞する。その姿を近くで見てきたからこそ、「（障害があるからといって）先回りして何でもやってあげるのは危ない気がする」「障害を踏まえた上で、どう対応するかが大切」と力を込める。

来年二月には、地元・つくばで「ユニバーサル・ソーラン」の要素を取り入れたイベントも考えているという。「自分たちの踊りをつくばに根付かせ、住民を巻き込んでつくばを元気にしたい」。目を輝かせた。

（中津芳子）

いばらき ひと物語